

乳児期における 社会性の発達

(その一)

丹 羽 淑 子

児 童 発 達 講 座 ④



子どもの社会行動は未分化の混沌とした行動がだんだんと定型化して、子どもの内部的性質と考えられるようになる。やがて人々はこれを社会性と呼ぶようになる。「社会性とは、その個人の身についた性質として社会的行動の原因が考えられる場合に用いられる概念である」として、社会性や社会行動に動因的性質が含まれていることを示唆している。私はかような理解に従って、次に乳児期の特殊性を考えてみよう。

(一) 乳児期の特殊性

乳児期における社会性の発達はどうのようにとらえたらよいであろうか。この問題を考察するに先立って、まず社会性ということばの意味を簡単にのべ、つづいて乳児期とその環境との特殊な関係を明らかにしておこうとおもう。

(二) 社会性の意義について

私はここに故後藤岩男氏のことばを引用したい。同氏によれば、

私どもは子どもの誕生から満一年を乳児期とよび、出生から約四週間を新生児期とよんで人間の子どもの純粋に生物的原型としての特徴をもつ時期を区別している。今日までの心理学者が見出したところによれば、この新生児期の子どもには分化した情動もなければ

ば、思考過程も存在しない。新生児の生活はいわば安静と興奮の二つの状態で占められており、外部にあらわれるうごきは、^②内部感受性による全体的な反射作用のあらわれである。外部刺激はこの場合、高い刺激障壁で保護され、わずかにこの高い障壁、すなわち識閥を突破するほどのつよい刺激に対しては未統合の全体的反射で反応する。^③情動もまたはじめは分化したのではない。安静状態にあるときの内部生理的均衡が飢えや内臓の緊張、痛苦などによって破られて外部に放出されるとき興奮状態としてあらわれる。このような場合に、例えば子どもは泣きさけぶのである。それで新生児の段階は、生物的な未分化の状態として特徴づけることができる。もう一つの特徴は、新生児の無援性ということである。彼らは自分の生命を維持するために自分だけでは何一つできない。母親かあるいはそれにかわる者によって乳首を口の中に入れてもらわなければ食事でありつくことができないのである。未統合の反射作用で特徴づけられる乳児に生来的に備わった唯一の装備は、口に入れられた乳首を吸い、嚥下する協応作用である。

このようにたよりない新生児も一年の間におどろくほどの発達を遂げる。情動の発達においても、嫉妬、憎悪、羨望および所有欲などのこまかなニュアンスの豊かな表出が認められるようになり、新しい、より複雑な社会関係も成立し、禁止や命令などにも答えるこ

とができるようになる。空間における身体的定位の知覚も、事物に対する関係の理解も始まるのである。もはやかれらは薄明の中のたよりない生活体ではない。この一年間にかかれらは、生物的存在から社会的、人間的存在へと急激な変化を遂げるのである。

(三) 乳児期における環境の意味

このように乳児期の変化を可能ならしめるものは何であろうか。それはいうまでもなく、生活体に生来的に備わっている装備、成長への潜在性によることはいうまでもないが、まったく頼りない存在であった時代を顧みるとき、生命の維持のみか、その成長に積極的に協力した援助者の手を見逃すことはできない。それは母親あるいは母親の役割をとる者の存在である。

乳児の環境は、子どもを現実にとり囲むものの全体から構成されている。種々な家族の成員とその相互の関係から成り立っている。施設に養育される場合は、その施設の人々から構成されている。しかし子どもの欲求を満足させる人物、即ち母親は環境から出てくる力の媒介者としてはたらく。乳児期においては、母親は乳児の環境因子を代表するものである。ここに、この時代の環境の特殊性がある。かくして出生の時から乳児と母親（環境）との相互作用が展開する。しかも他のいかなる時期にもましてこの両者の関係は密接である。いわば乳児期における母子関係は「母子共稜的」な「閉じら

れた体制」にあると言えよう。したがって乳児の社会行動は必然、乳児環境体制においてみる必要がある。私は以上の考えに基づいて社会的な発達を精神分析学から借用した「対象関係」という用語においてその発生と成立過程とを発達の進行方向にそって追求して考察しようとおもう。以上で、研究への基本的態度を明らかにしたつもりである。次に乳児期のこの種の研究にあたって、一般的な注意を述べよう。

二、社会性発達の研究方法

(一) 展開上の注意

乳児は心理学研究上重要な道具である言語をもたない、社会的行動といっても、新しい定まった行動としてそれが発現するわけではない。その上、あらわれた行動はたえず変化化する。乳児の行動のあらわれは成人の行動の解釈から類推することはきわめて困難で、それは主観的解釈におち入り易い。それゆえ、当然研究の方法にもいろいろな制約を受けることになる。変化の過程をみるためには、長期の縦断的な継続観察が必要である。特に新生児の時期は継続して精密に生活経過が観察記録される必要がある。しかし人数に制限があるので、特定の行動は横断的な実験観察を統計的に妥当な数で行なって前者の欠陥を補わなければならない。観察実施上の注意は

(1) 乳児の行動を全体的にみること。

(2) 発現した行動の記録は、あらわれた日、時、現象、発現時の環境状況をその都度詳しく記録する。

(3) 観察はできるだけ客観的に行なって、大はばな主観的解釈を混入しないようにしなければならない。記録も、記述的であること。

(4) 被観察者の選択は、正常児、正常な両親をもつこと。夫婦単位の家族構成が好ましい。

(5) 母親の協力をまつとき、前もって観察の要領が十分指導されていないなければならない。乳児期の研究はおおくの時間を要し、根気の

いる仕事であるので、有効で正確しかも容易な記録の方法が工夫される必要がある。

(二) 継続的直接観察法

私は直接観察にあたって二通りの方法を講じた。一つは私自身の観察、検査、実験をもってし、今一つは母親の協力を得て生活経過記録表に誕生から一カ月間記入してもらった。あらかじめ用意されたクラフ用紙にまず二十四時間の目盛りを切り、睡眠(青色)覚醒(赤)仮睡(点線)をその都度記入し、更に授乳(所要時間、種類(母乳と人工栄養)量)、排便(▲)、排尿(△)、泣くこと(×)、沐浴(B)を記入する。なお観察した現象、その他の覚え書を備考に記録する。二ヶ月以後は、行動項目を記したチェック・リストのスリ

ップを一日一枚ずつ、月日を記入して発現項目に記入してもらう。その他母親に毎日、日記を自由に書いてもらう。これは母親の心の状態を子どもの記録に比較してみるのにきわめて有効であった。

以上の方法で得た資料で混沌たる行動の中から徐々に漸進的に、精神機能が分化する様相を明らかにすることができた。殊に「泣くこと」と「微笑」の現象をその発生の当初から追求してゆくと生後一カ月間の変化の過程のうちに、純粹に生理的原型から心理的機能のはたらく段階に移行する過程が認められるのである。かくして知覚の発達に伴って外界の刺激のうち特に人間的刺激に対する反応はことごとく情動を通じて発現することを見出した。特に微笑反応は年令の進むに従って、一定のパターンがあらわれ、発達的变化がこの一年間に観られた。この微笑現象はその発現時の子どもの全体的成熟状態や刺激の質的検討を更に精密に行なう必要があるようである。なぜかといえばこの現象を追求することは、単に情動分化の過程を明らかにするばかりでなく、生活一年間の対象関係の発達の道標を指摘するように思われるからである。

それ故、これらの現象を重点的に実験の場において観察し、それを数量化して全体的傾向の中に当問題の意義を探ることとする。また正常な微笑発現のパターンから逸脱するケースをながめると、おのずと対象関係の成立に失敗した場合と符合する。そこでその原因

を探ることによって、対象関係成立上必須な条件を帰納的に見出すことができよう。以上を次号にのべることとし、今回は直接観察を通じて得た資料を基礎として、新生児の段階における精神機能の分化の過程の中に泣くことと微笑現象の変化の様相をたどって行こうとおもう。

三、新生児期、対象関係成立の基礎

生活経過記録表、観察記録及び発達検査の結果をもとに、それぞれの項目に符号番号をつけて、出現順位に各項目を配列した（項目、泣くこと・仮睡・顔面表情・哺乳・把握・身体運動・学習・睡眠・微笑・排泄・発声・感官知覚）。また泣くことと微笑とは殊にその発現時、条件、現象を精密に検討し、フィルムにとらえて客観的考察の資料とした。

(一) 泣くこと

(A) 社会的行動と新生児の泣くこと

よく人は子どもの最初の産声にも社会的意味があるようにおもう。もちろん、赤ん坊は外界の交渉なしでは生命を維持してゆくことはできない。空腹や痛苦、温度、湿度の加減が生理的緊張をおこしたり、生理的に受け入れられない程度であるとき、赤ん坊は泣くのである。彼らが泣くことは、結果的におとなの反応をそのつどよびお

こすので、外界との交渉の媒介としての役割を果すという特殊な心理的意味をもつ、この意味においては社会的行動である。しかし泣くことを社会的行動という場合に注意すべきことは、園原太郎氏も述べているように、それによって子どもとの交渉に入るのは、子どもに接するおとなの側からで、これがはじめから新生児の社会的交渉を目的とする行動かどうかは不明である。それが真に乳児の側で、意図的志向的に行使されるようになるまでには、ある日時が必要であろう。この間の事情を明らかにするため、一乳児の泣くという現象をとりあげて一カ月追跡し、その表現、発現時の状態、および停止条件を分析してこれを整理し、純粹に生理的現象が心理的社会的意味をもつようになる過程を明らかにしようとおもう。

(B)泣くことの分化過程

生後一週間で顯著な特徴は最初の三日間、仮睡状態が生活時間の大半を占め(表1)、その間しばしば泣き、一分程ついで自然にやむことである。そうして最初の三日間は出生過程の後遺症のような状態がみうけられ、しばしば茶褐色の液体を吐しゃする。その前後はげしく泣いている。又最初の排尿(生後十一時間四十五分)排便(二十五時間後)前に泣いたが、排泄後はよく眠ることが観察された。第四日目からは仮睡状態は減少して睡眠と覚醒状態が比較的に周期的となる。

表 1. 新生児の睡眠、仮睡、覚醒

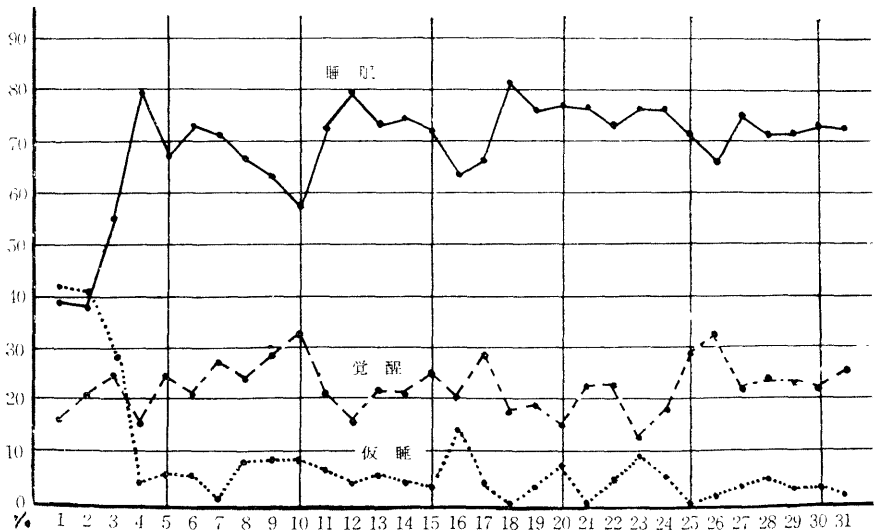


表 2. Crying の発現とその停止条件の分析 (S児の場合)

週 令	発現時の状態	停止条件	発現頻度	備 考	
0—7 第 一 週	出生時 (産声)	自然的停止	1	仮睡中は1分位の間隔をおいて泣く、回数は仮睡中を1まとめした	
	出生直後 (沐浴中)	同	1		
	茶褐色の液体を吐く 13時間後	同	2		
	仮睡中	同	17		
	排便前	排便終了とともに停止	13		
	室内温度低下	寝具をととのえ、温度調節	1		
	覚醒時	砂糖湯、白湯を与える	4		
8—14 第 二 週	同 空腹時	授乳によって停止	28	主として沐浴後	
	同 同	哺乳ビンの吸取口の調節	1		
	仮睡中	自然的停止	4		※かたい固形便の時のみ
	覚醒中哺乳定刻前	授乳によって停止	42		
	排便前	排便終了によって停止	10		
	覚醒中	おしめをとりかえる	3		
同 入浴後	白湯を与える	3			
睡眠前	泣きながら就眠	2			
15—21 第 三 週	覚醒中	不明、泣きやまず	5	この日母親とみに倦怠感をおぼえる	
	同	自然的停止	8		
	同 排便前	授乳によって泣きやむ	44		
	同 同	白湯を与えて停止	6		
22—30 第 四 週 (第 五 週 に)	同 同	排泄後停止	7	※主として人工栄養のためか、かたい固形便をすることが多い	
	同 同	理由不明、泣きやまず	4		
	仮睡中	自然的停止	7		
	仮眠中また覚醒中	就眠によって停止	11		
	同	掛布の上からかるくたく	1		
	覚醒中	乳をあたえる	8		
	同	抱きあげて室内を歩く	3		
	排便前	排便終了とともに停止	3		
授乳定刻直前	授乳	37			
28, 29, 30日覚醒中	側へ近づいて話しかける	5	28. 29 Social Smile		
	おむつを代える、下腹部両脚を掌でなでてやる	12			

表 3. 泣くことの停止理由

停 止 理 由	1 wk %	2 wk %	3 wk %	4 wk %
自然的停止 (主として仮睡時)	30.88	8.69	11.59	8.04
内臓的緊張による crying が外的に解除されて停止	69.12	84.06	81.16	58.62
社会的 (外的) 刺激を受容して停止	○	○	○	33.33
不 明	○	7.24	7.25	○

かくして第一週のおわり頃には泣くことも誕生直後の未分化な出現象から、同じ内部感受性によるものでも、より分化した飢餓、痛苦などの内臓の緊張によることが一層明らかとなった(表二、三参照)。このような理由で泣くことが外的(母親)に解除されて停止する程度は、第二週、第三週で更に高くなり、第四週になると社会的刺激を受けて停止することが全体の停止理由の三分の一を占めるに至った。二十八日目の記録によると、「小さい音にも驚いて目をさまして泣く、空腹時は泣き叫ぶ子の頬や口のあたりを指でふれると、泣くのを止めて口をつぼめ、頭を動かして物を探すような動きをする。そのまま授乳しないでおくと、泣き方は一層激しくなり涙を出して泣く、空腹の時以外に泣くとき、殊にねむりに落ちる前に側において語りかけるとだんだん泣き声が喉音に変わる。覚醒中抱くと泣き止み、寝床にかえずと泣く。」二十九日、「授乳時間直前に、空腹で泣き叫んでいる子どもに接近すると静かになって両唇で吸啜運動をおこなった。」このような行動は口辺に刺激を与えて泣きやんだ時とおなじく、空腹時に限定されていた。乳児のこの行動は、外的刺激が、時間的に飢餓の内部知覚と合致するときのみ刺激に反応を生じる、スヒッツが⁹⁾「環境知覚は不満足な欲動要求の機能のうちに生起する」というのは以上の事情を物語るものであろう。覚醒時間は徐々に延長するが独りでも泣かなくなる。更に、一、二週間

経過するうちに、人的刺激に対する反応はいよいよ明らかとなり、近づいてくる成人を緊張した表情で見守るようになり、接触に対して快の表情を示し、立ち去ると泣き始めた。

はじめに、純粹に生理的現象であった泣くことは、生後一カ月の経過のうちにたびたび繰返される試行錯誤的行動から、それに対する成人(主として母親)の反応によって条件づけが成立し、泣くという情動に導かれ、無目的な現象から、目的をもった社会的行動へと分化してゆく過程が観察された。言うまでもなく泣くことの発現頻数や停止条件、その分化の時期には個人差がある。他に観察した家庭児の場合も、園原氏の報告とも多少の相違を認めた。S児の場合はいきわめて泣くことが少ない。今一人の観察児は浸湿性体質と診断され二週間頃からしばしば泣いた。一例によって結論づけられぬことはもちろんであるが、以上、泣くことの分化の過程は示されたとおもう。本児が正常に出生し、健康体であったことと、正確に記録された生活記録で子どもの生活のリズムをとらえ、細心の注意で育児に専念した母親の安定した情緒生活と相伴ってこの結果をみたことと思う。

(二) 新生児の「微笑」

(A) 新生児の微笑の名称、新生児期の微笑のようなあらわれを、普通三カ月頃、おとなの微笑や音声に対して反応する微笑と区別して心

理学者はいろいろの用語で記述している。例えば「反射的的微笑」とか「無条件の微笑」とかまた「筋肉運動型の微笑」と言つて、三カ月以後通常あらわれる「社会的」微笑、「条件づけられた微笑」真の「また」意味をもつ「微笑」と區別する、私はこのような現われが個体の中にどのように発生し、どのような場合にあらわれ、いかにして変化し、いわゆる社会的微笑とどのようにつながるかという点を全体的発達変化の過程の中で注目した。以下はS児による微笑の発現状況と現象との逐日的記録である。

(B)微笑の分化過程、生後四日目、最初のあらわれは入浴中、第二回は授乳後に微笑のような表出が認められた。両眼を半ば開き口の両端の筋肉を上部につりあげ、口辺の筋肉がわずかにけいれんする。

その後、三十分間、寢床に目覚めて安静状態を続ける。この日は睡眠覚醒の交替現象は前三日間より目立って規則的となる。ミルク(90cc)摂取の後、仰臥して安静中再び前述の微笑のようなけいれんが浮ぶ。十日目、安静時(沐浴中、授乳後、充分な睡眠から目覚めたとき)微笑がさかんにあらわれる。その表出は一層明らかに微笑の形態をとるようになる。十二日目、安静時、(十日の場合と同様)唇の筋肉を緊張させ口を半開にして、「o:」音の発音の際にとる口の表情をしばしば認める。音声は出ない。その間、微笑のようなけいれんもあらわれる。頬におとなの手がふれると頭をまわす。弱

い光をみつめる。空腹時、口唇にふれた私の指を吸う。十三日、安静時に子どもの口辺を指で押すとほほえみのようなけいれんがおこる。空腹時に同じ試みをする、微笑は生じないが吸啜反射が認められた。十四日目、頬、両脚、下腹部を母親の掌で愛撫すると体の動きが盛んとなり、表情が目立ってゆるんでくる。安静の時、一定のところを注視している。片頬に菜を塗布すると反対の側に首を動かす。十九日、顔面表情が目立ってはっきりとしてくる。泣き声に変化が認められ、涙を出して泣く。微笑を認める回数が多くなった。かくして生後二十九日に、S児は観察者の実験に明らかに反応して微笑をあらわした。安静時の子どもに、五十糶の間隔を保つて実験者の正面の顔を示す。声と接触を統制し、肯くような動作をとる。微笑があらわれ、頂点に達した時、横顔を示すように顔を廻す。反応が変わるとまた再び正面の顔を示すという実験である。

以上の微笑が反応としておこった頃の精神発達をみると、二十一日、側を動く人に目を止めて眼球を動かす。二十二日満腹すると乳首を唇からつき出す。二十三日、室内を歩く人を大きく目でおう。二十六日、抱きあげると泣き止み、床にかえすと泣く。二十八日、目と首の協応作用可能となる。同日、父親の顔と音声に対して微笑反応があらわれたというので翌二十九日、実験を行なつてこれを確認した。

(c) 考察

以上を要約すると

(1) 新生児の微笑の最初に現われる時期は生後四、五日か十日前後という多くの観察者の発見と一致する。出生時には微笑の筋肉運動パターンは存在しない。

(2) 新生児の微笑の性質、(a)その現象はその後の「社会的微笑」に似ているが、外的、視覚的、触覚的刺激に対する反応としては現われない。(b)表出状態は石川氏が「喜びの感情に毫も関係しない」と言うように、この年令段階の微笑は分化した感情ではない。しかし器質的に満足な安静状態におこり、興奮状態にはあらわれない。

(c) シャーリー (Shirley) その他は最初の微笑は口唇や頬のあたりに加えられた筋肉的、触覚的刺激に反射しておこると述べている。私が実証的に観たところでは最初の発現はかかる外的刺激に、状態のいかんにかかわらずあらわれるものではなかった。この観察は他の新生児群にも行なったがいずれも彼女の発見には否定的であった。最初の発現は安静時における自然的発生であった。空腹の時に口唇に加えた刺激に対しては吸嚙反射のみ現われた(十三日)。しかし同日安静時に行なった実験では外的刺激が口唇にあたえられ、これに微笑のけいれんが生じた。これは最初の発生から九日目で、この時は他の外的刺激もある程度既に知覚できる段階に達している。シャ

ーリーの観察は、多分、この段階ではじめて行なわれたと推察できる。(d) 新生児の微笑は反射の一種で、他の新生児期の反射であるモーロー反射 (Moro Reflex) 或はハビンスキー反射 (Babinski Reflex) のように三カ月頃消滅するという考えに対し、マックグロウ (McGraw) 及びワロン (Wallon) が示唆し、スピッツ (Spitz) がより明確に指摘したように、ある時期に消滅してしまうものでなく、より高次の段階へと統合されてゆく、同じ方向性をもった、連続的発達過程であることが微笑のあらわれ方とその変化の過程に明らかにされたとおもう。なお、人間胎生期において、外的刺激に反応し始めるのは「口から鼻」にかけての部分であるというフッカー (Hooker) の「人間胎生期の反射作用」の報告と、生後一週間の知覚の先駆である器官は口腔であるとし、吸嚙と嚙下作用をつかさどる口腔は最初の積極的統合筋肉作用をおこなうもので、口腔とその周辺の部分は統制を受けるに至る最初の筋肉であるという²³知見をあわせ考察すると、発達の連続性が更に支持されるとおもわれる。われわれは次によく現われはじめた「真の」微笑の現象の性質をきわめ、その発達を追求するであろう。

新生児の情動は未分化で感情と名づけるほどのものは見られなかった。しかし生後一カ月の経過のうちに未分化の混沌から身体各部に生長と発達、量的増加と特殊な構造面における分化がおこなわれ

るように、感情においても、きわめて緩慢な変化ではあるが、この時期に情動発達へのきざし、そのあらわれを通じて子どもが外界とのつながりをもちはじめゆく様相が認められる。誕生時に未分化ながら安静と興奮状態が認められ、安静の状態から後に快の肯定的情動へと分化する筋肉運動的微笑が生じ、一方興奮状態の最初の表出である泣き声が生理的性質から出発しつつ、新生児の無接性の故に、自然に外界との交渉の媒介としての役割を演じる特殊な心理的意味をもちながら分化してゆく。このように情動の表現を通じて社会化が学習過程において展開してゆく。それは新生児期にすでにその発端を観察できるのである。乳児におけるこのような表現機能は、行動を実現する機能よりもはるかに以前に出現するようである。つまり乳児は、物事ができるようになるまえに、他人(母親)に知らせることができる。ワロンは^⑧この表現機能を言語活動の前ぶれと呼ぶ。言語発生の機能的面はやはり、前述の泣き声から変化した喉音が覚醒時のきげんのよい時の軟口蓋音と共に発現するが、器官の整備以前に外界への要求シグナルは機能できるのである。そして二カ月以後、子どもたちは一層機能的に整備され、より明確に要求充足のための表出運動が洗練され、分化されてゆくことであろう。

(東洋英和女学院短期大学)

引用文献

1. 後藤岩男, 児童と社会生活, 児童心理叢書Ⅶ 東京文理科大学内児童研究

2. 金子書房 昭24
Spitz, R.A., Die Entstehung der ersten Objektbeziehungen.
3. Spitz, R.A., Diarrhetic and Coenstructive Organization. *Psy. Rev.*, XXXI(1945), 2
4. , The Primal Cavity. *The Psychoanalytic Study of the Child.* X, New York: International Univ. Press, 1955
6. Simmel, G., Soziologie cited from Spitz's 2
7. 國原太郎, 生後十日間の新生児の行動観察, 実験心理学研究第3輯, 第2巻 昭和14年
9. Spitz, R. A., 2
10. Shilly, M.M., The First Two Years. Minneapolis: Univ. of Minnesota Press, Vol. 2, 1933 (infelix smile)
11. Watson, J.B., Experimental Studies on the Growth of the Emotions. in Murchison (ed) Psychology of 1925. ("Unconditioned smile")
12. Spitz, R.A., The Smiling Response. *Gen. Psychol. Monog.* 1946, 34
13. a. Buehler, C., The Social Behavior of Children. in Murchison(ed) Handbook of Child Psychology.
- b. Dennis, W., An experimental test of two theories of social smiling in infants. *J. Soc. Psychol.* 1935 (a. b. social smile)
14. Watson, J.B., 11 (conditioned smile)
15. Murphy and Newcomb: Experimental Social Psychology. (ed) Harper & Bro-New York, 1937 (true smile)
16. Spitz, R.A., 12 (semantic pattern of smile)
17. 丹羽淳子, 乳児における微笑反応の観察会, 日本心理学会第25回発表
18. 石川貞吉, 生後一年間における児童発達の観察, 児童書院発行, 大正四年
19. Shilly, M.M., 10.
20. McGraw: Growth: A study of Johnny and Jimmy. Appleton Cent. Crafts, Inc. New York, 1935
21. Wallon, H., L'Evolution Psychologique de L'Enfant. Librairie Armand Colin, 1941
22. Spitz, R.A., 12 & 2
23. Hooker, D., Reflex activities in the human fetus, in Barker R. G. Kounin, J.B., & Wright, H.F., (eds) Child Behaviors and Development McGraw Hill Book Co. Inc., New York, 1943
24. Spitz, R.A., 5
25. , 12
26. Wallon, H., 12